時代の美

六十七篇

為永春水作

うつ川國貞画

板元若林堂

梅素

へ13
3756
13

まぶた
のぶ美
三拾八
上の巻
きくの作
國貞画
ろうそく文て

きくの絵三十七の立
春水仙さくら色
ひてのさくら

北堂寺代ノ口説
三十七編上
為永春水作
歌川国貞画
丁卯新春
三十七編下
若狭屋梓

時代加賀見
戊辰新春
上編八冊
爲永作
國貞画
若林板
下編八冊

時代鏡
廿九編上
廿九編下

へ13
3756
号
巻13

時代鏡 三十九編 下の巻

春水作

國貞画

若林堂販

便利

越の飛馬川に堀井又助が
水中のたゝかひ
本傳一場の見所
なるを予が又
是も私意を
加へて次へ

時代三二
船越
惣吾
李光
紋若
刈根
の方

次編ハ出ル腰
稿ノ荒べその圖を
愛に描ノ枯木
の惣吾ぞ
再び春ハ遇
えらぶ
趣きを
さらん
示ぞ
ぞ
美ぞ

堀井又助

慶應二稔丙寅新刻

從是北 多賀領

三十六編つゞき

尾
む
さ

左分
大
丸
む

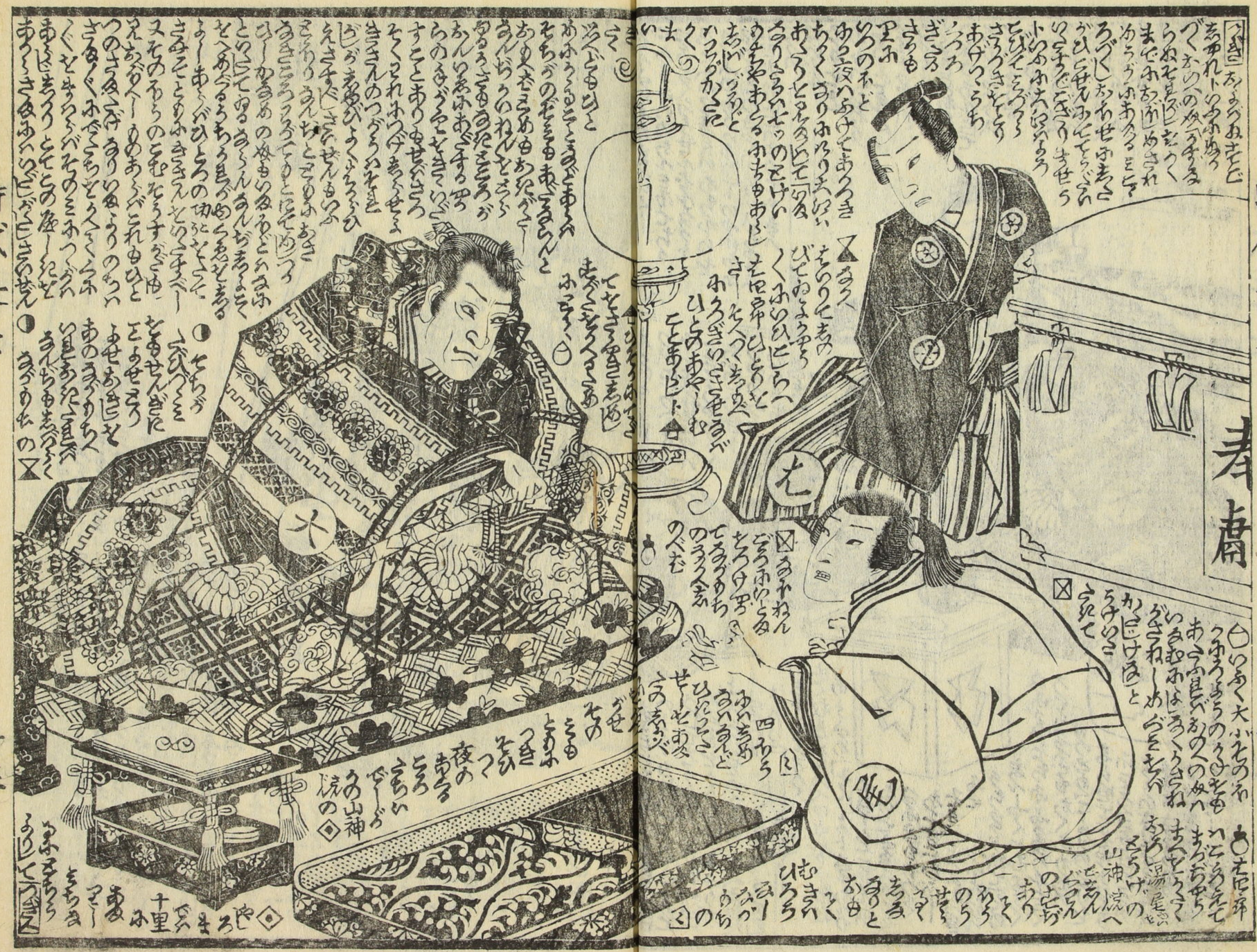
二
大
尾

尾
七
大

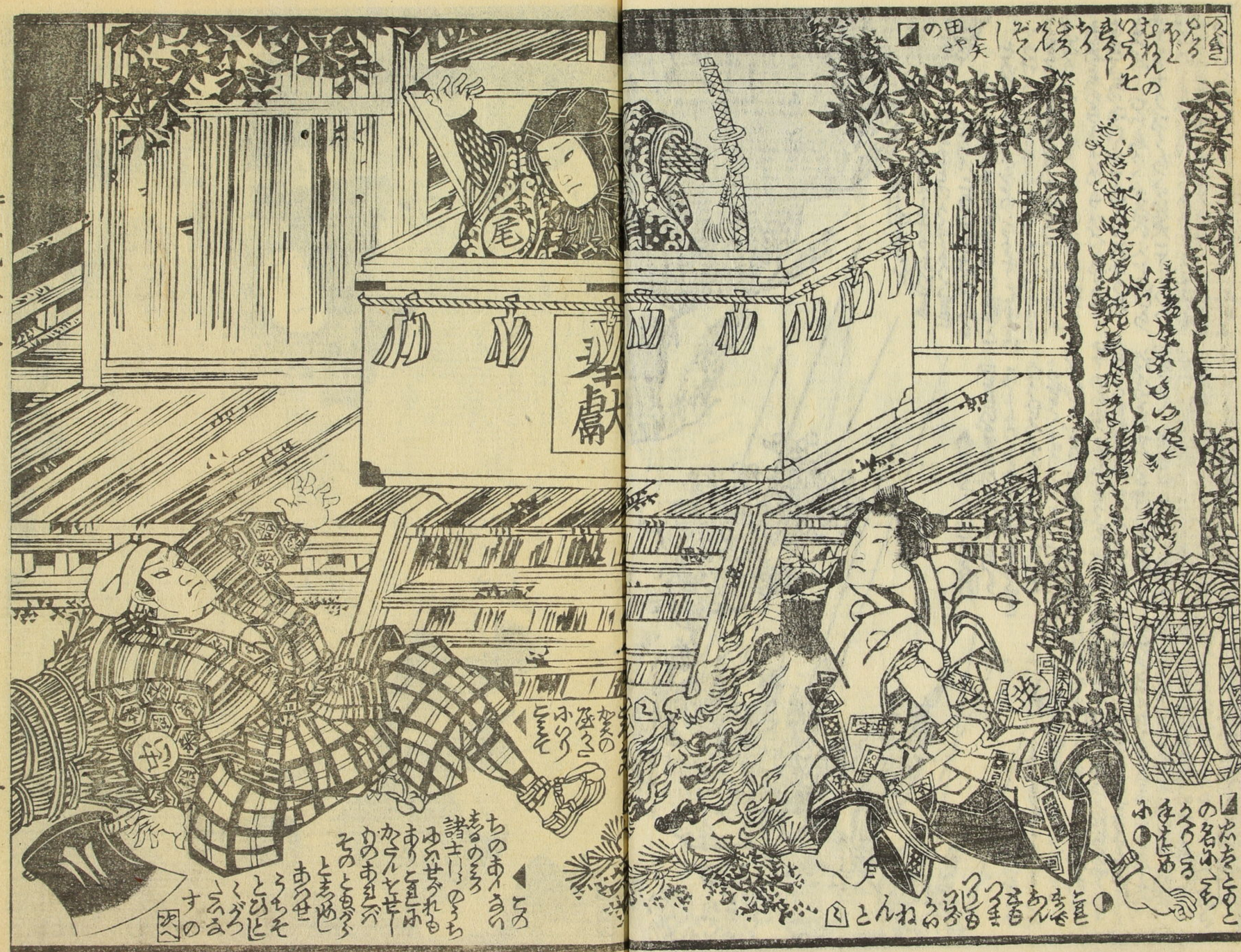
時代三十七

要
尾

國貞画
春水作

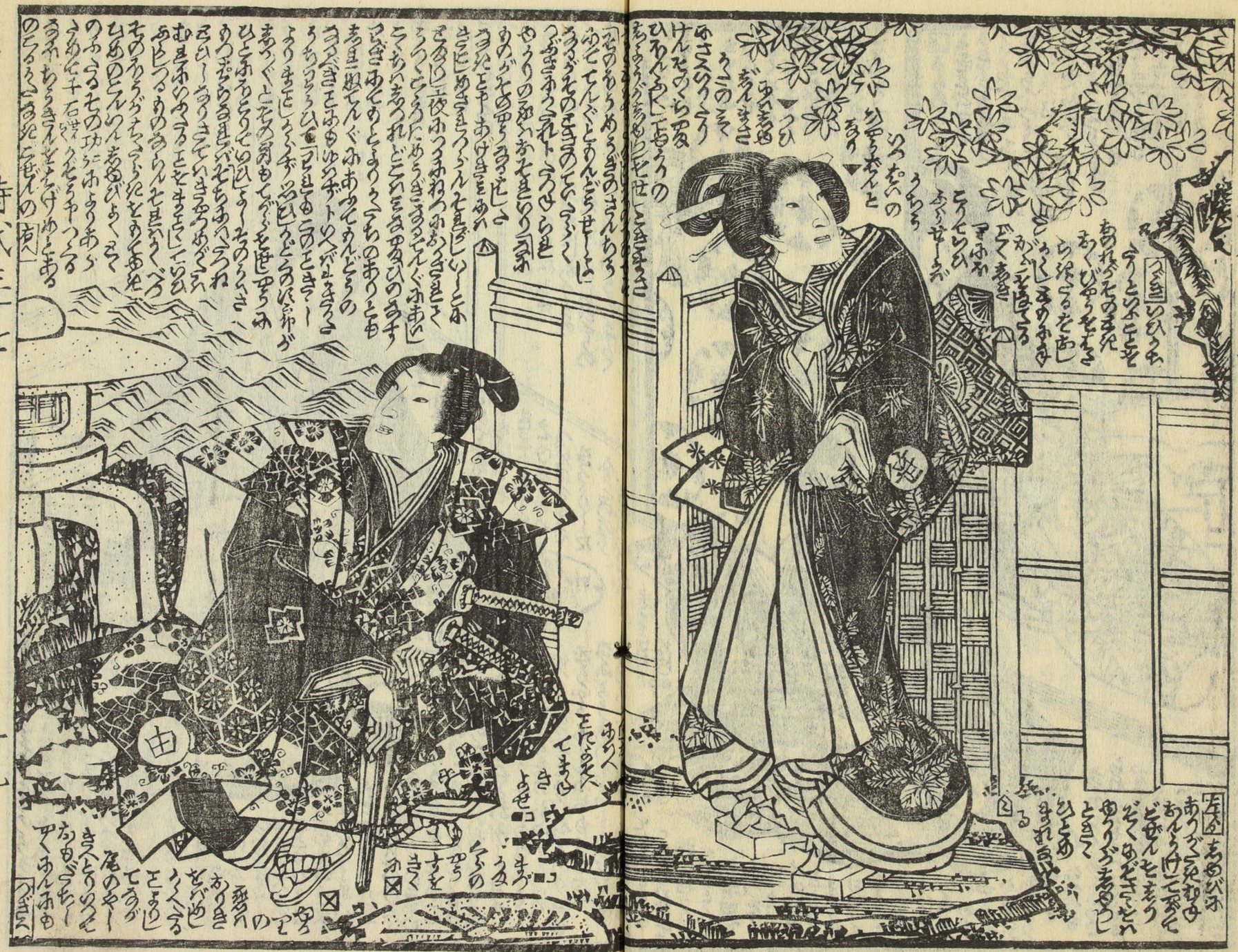

時代錦絵
孝齋
七
八

花四郎

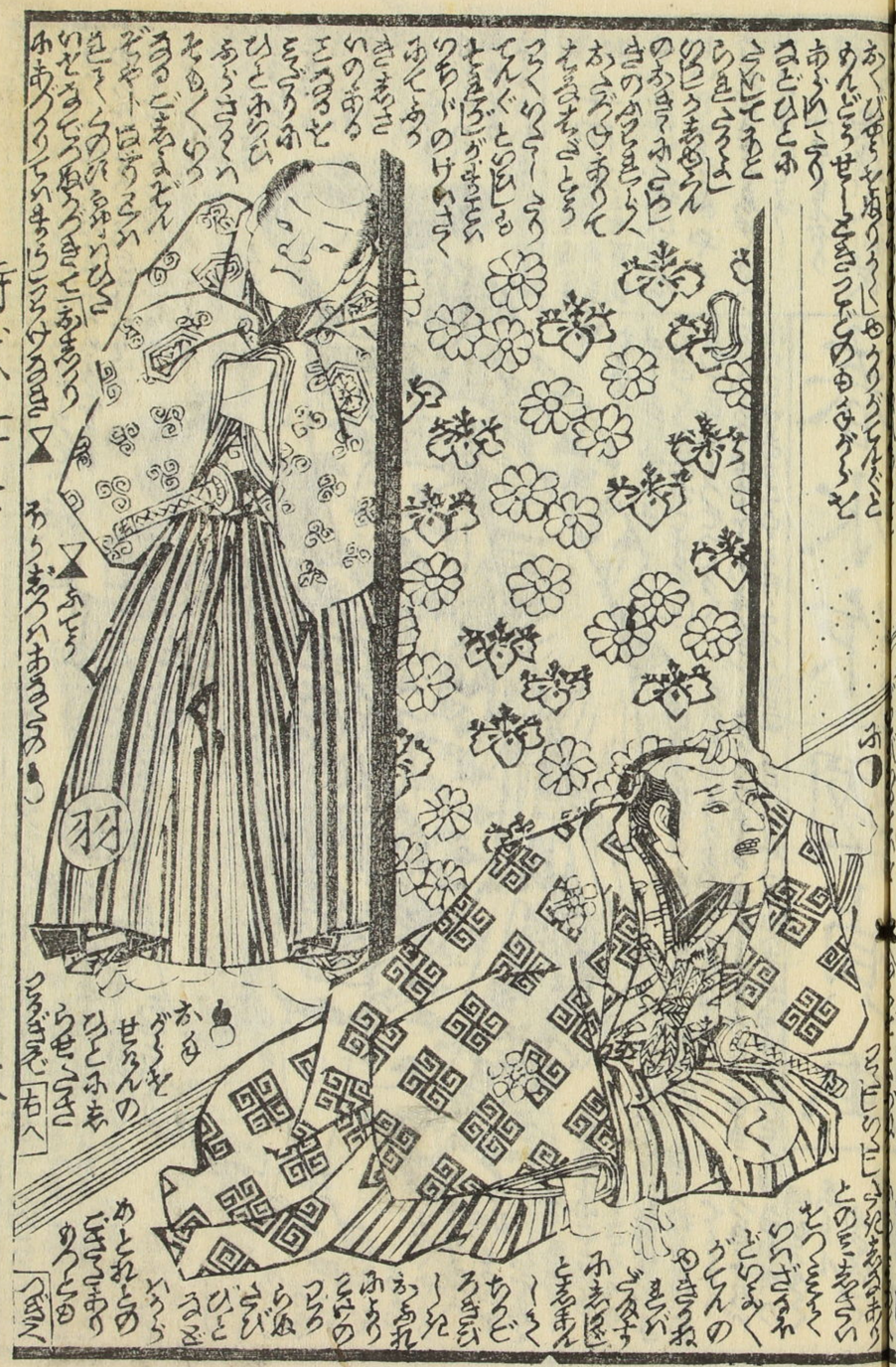


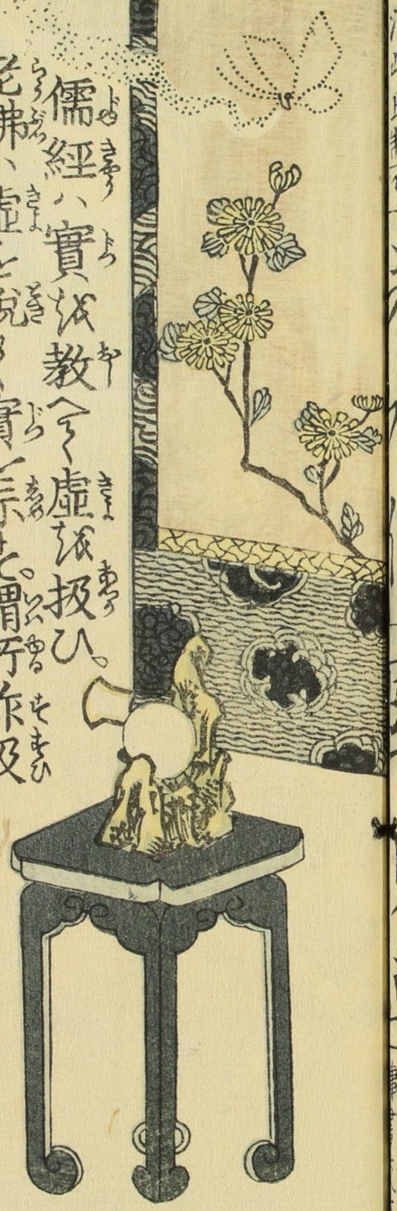
奴
忠
丸

尾
九



由

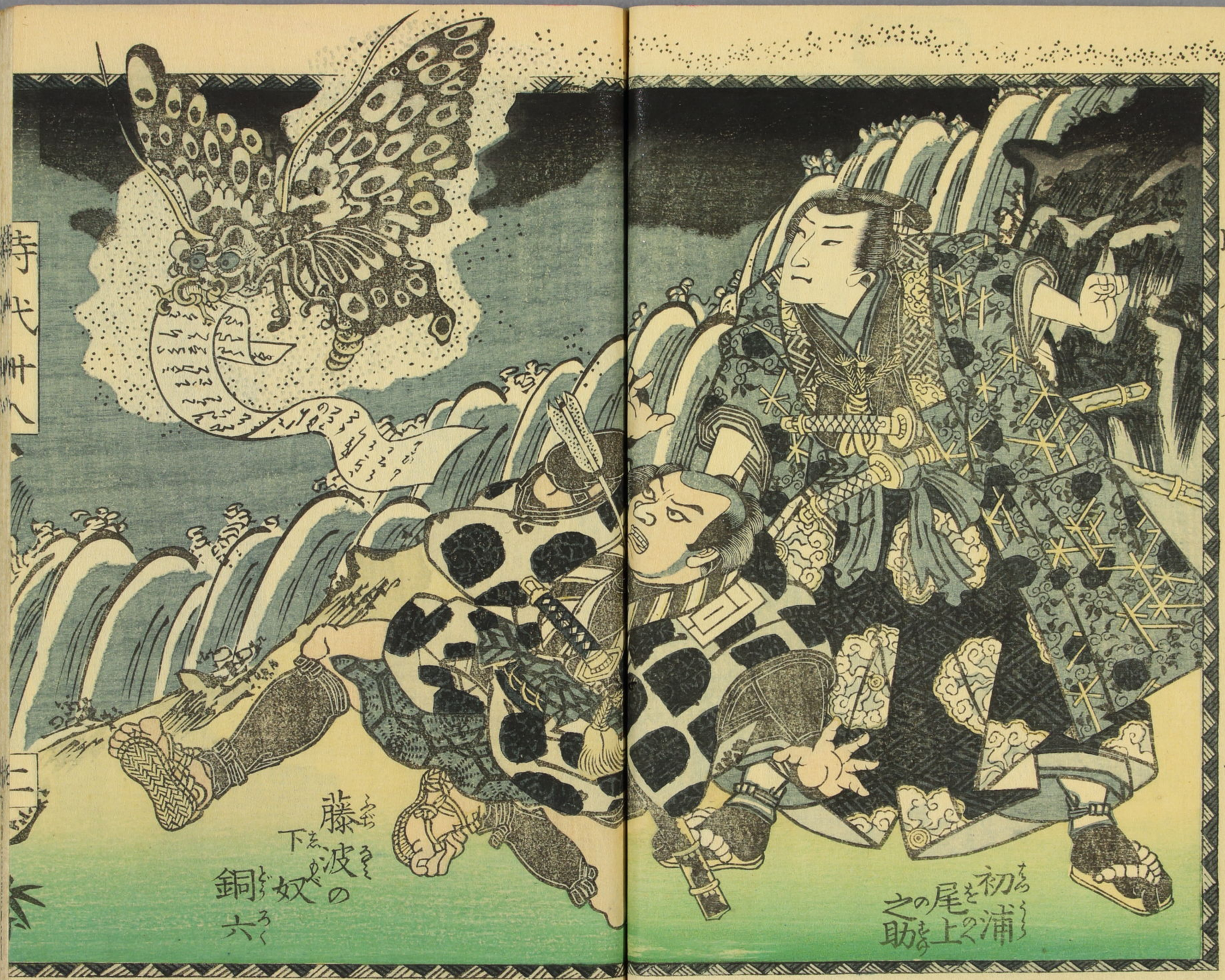

羽
く



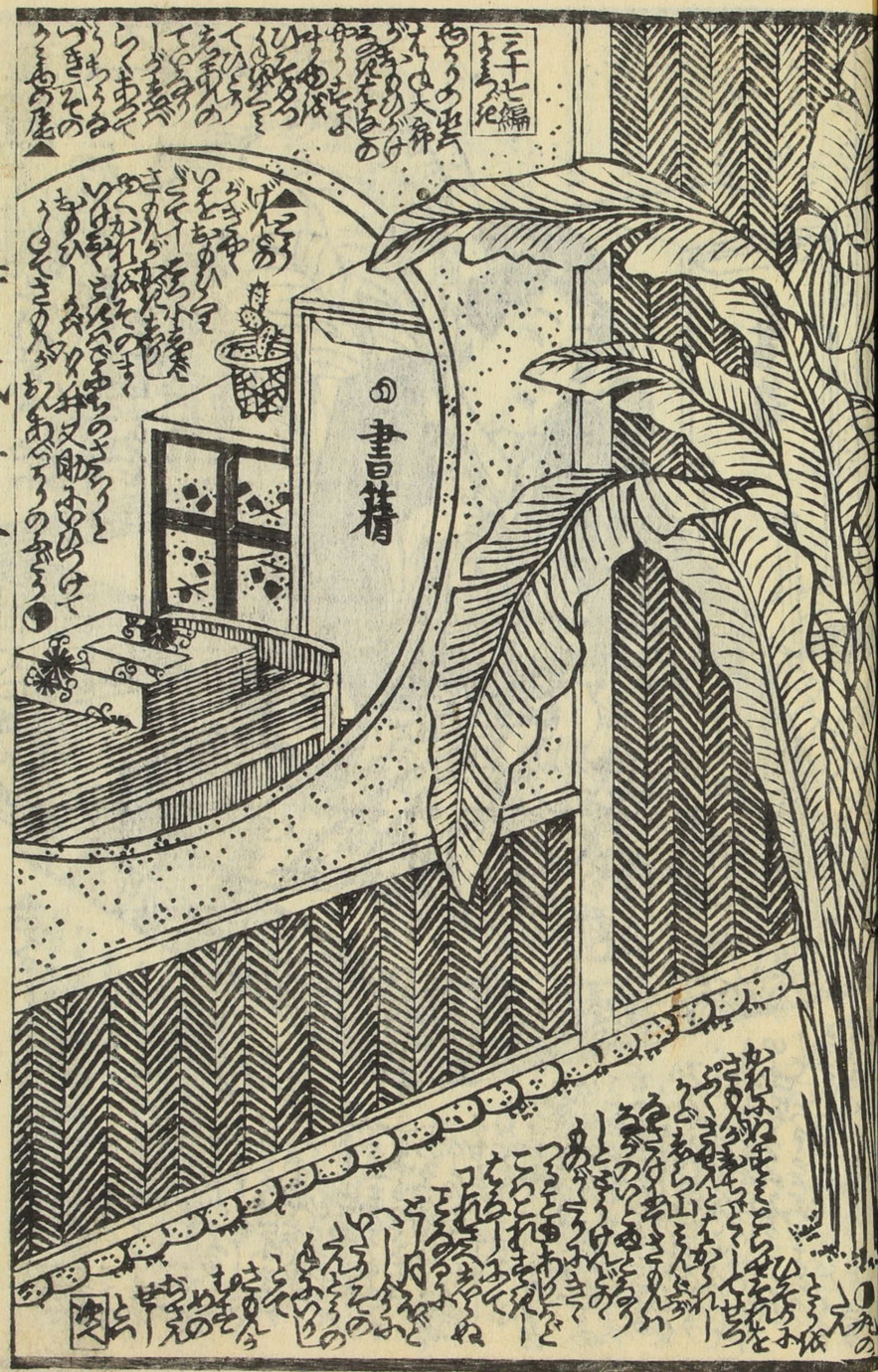
儒經ハ實ニ教ヘ〳〵虛ニ扱ひ。
老佛ハ虛を說〳〵實と示せ。謂所酢吸
の三教のごとく味ハ所ハ種々あれど。道ハ何ぞ二ツ。のみ。稗史ハ
虛實相半ば〳〵。勸懲を要とするゆゑ。本傳虛中の
虛ハ渡り〳〵。由緣ゆ蝶の怪ー氣あるも。局と結ぶの時ハ
いつ〳〵べ聊實と示せよ至らんあぞと這處ハ眞顏ハ
あり〳〵。此半員と塞ぐ夏ぞり。

丁卯孟春

爲永春水記

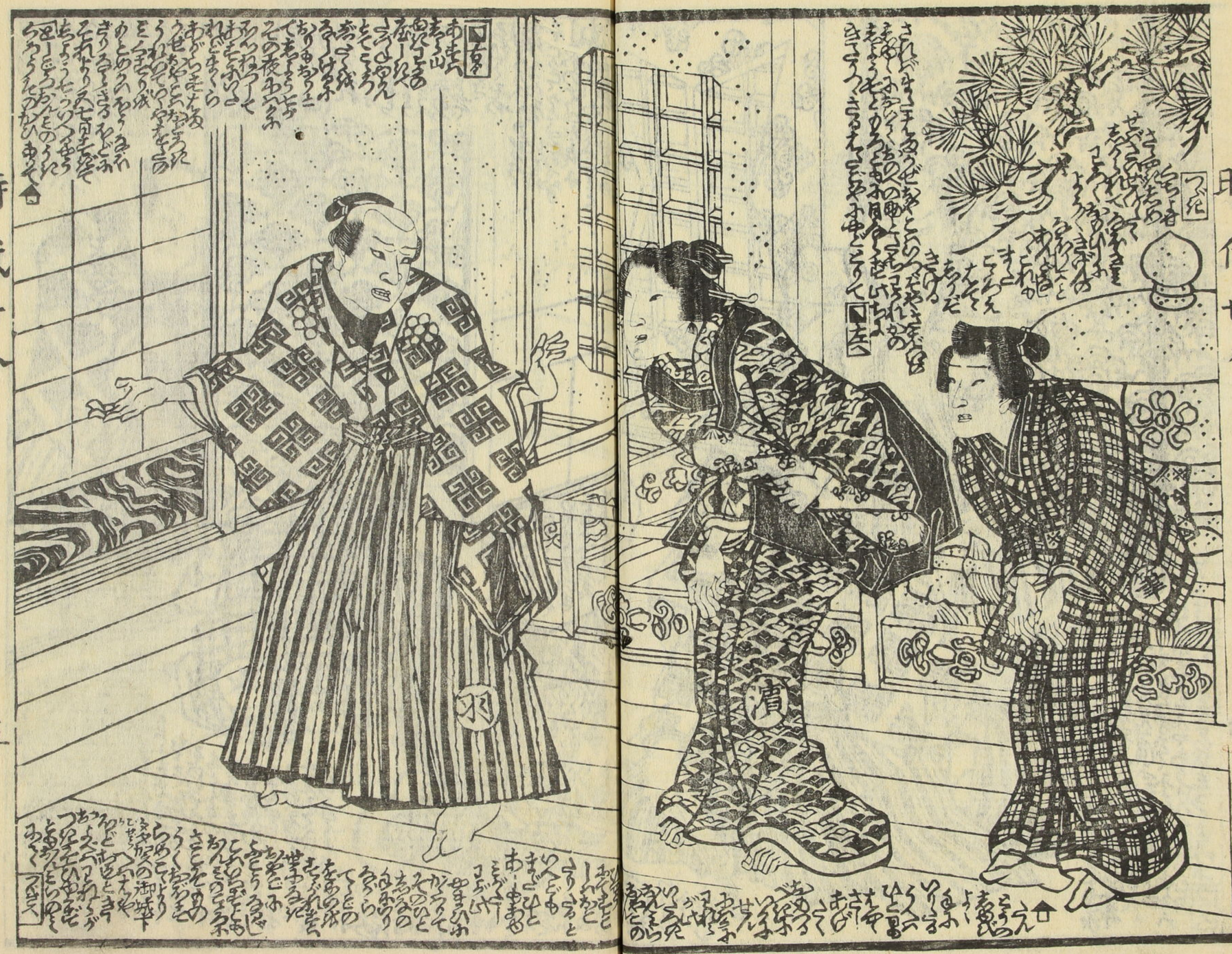

時代十八
藤波の下奴
銅六
初浦の尾上の助

三輪里の處女長者十六夜

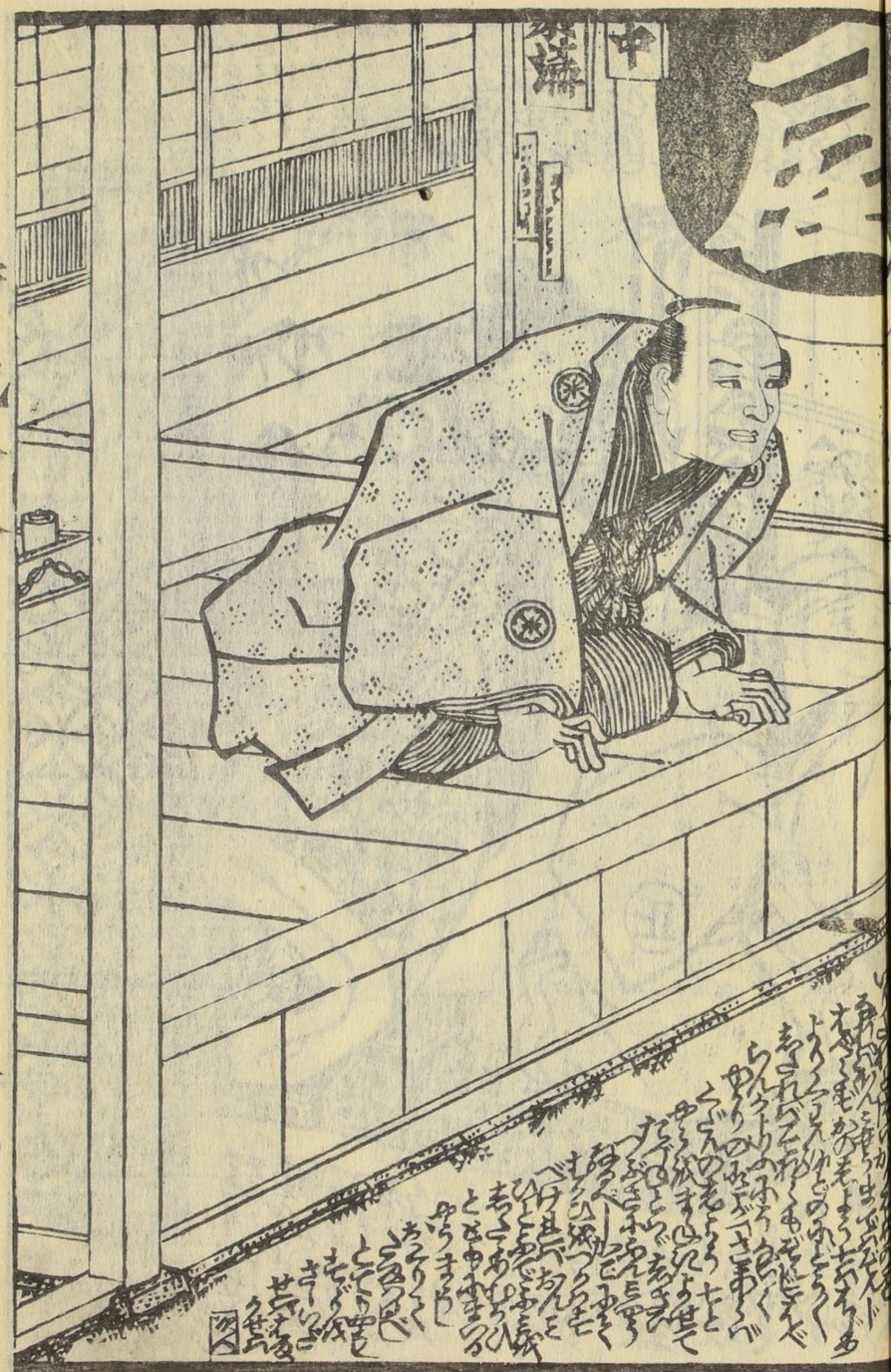


羽
くせ

由
書箱


羽
漬

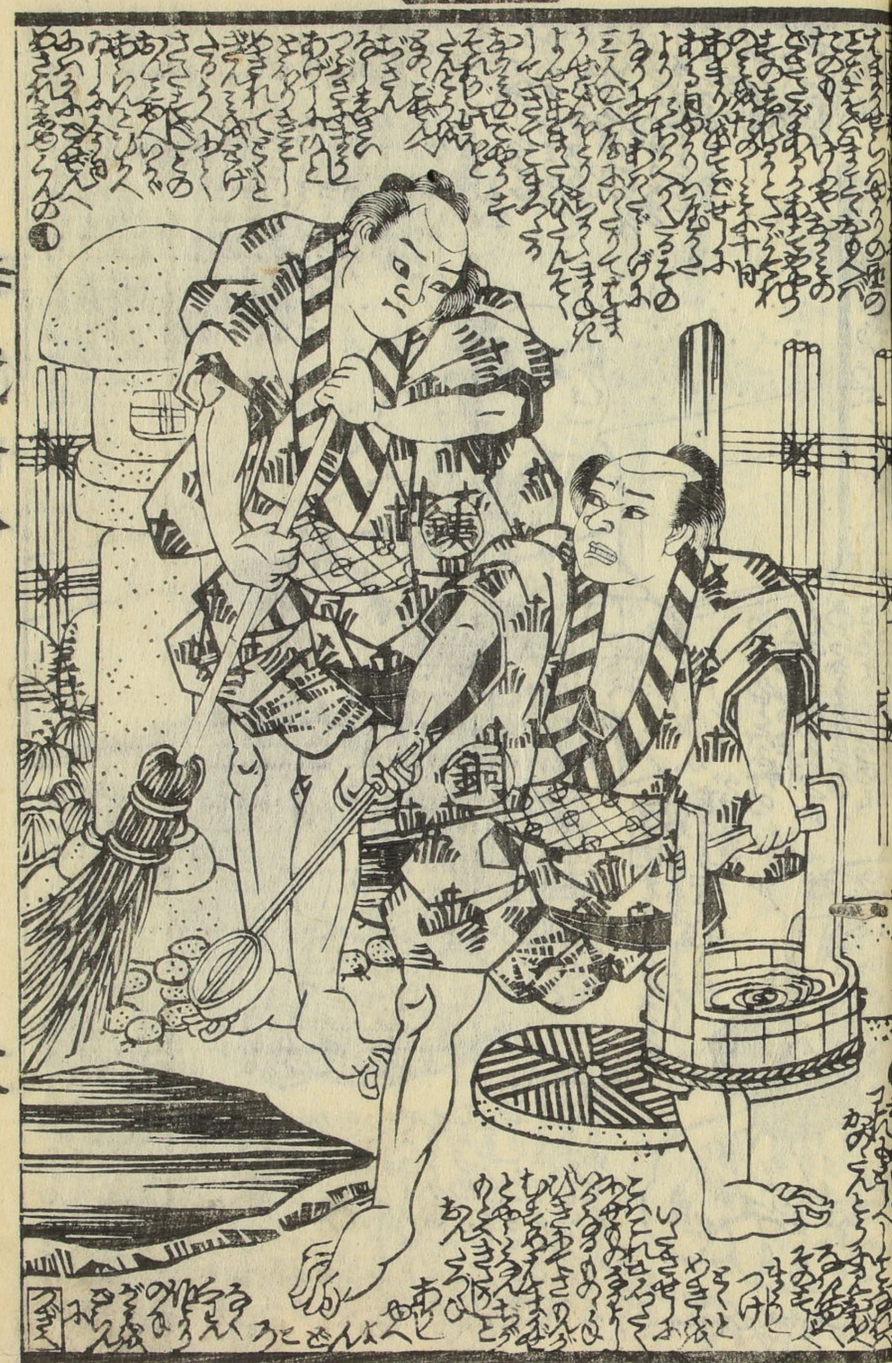
筆
潰
羽


屋
中

當屋
浦中
飛

濱
正
了
筆

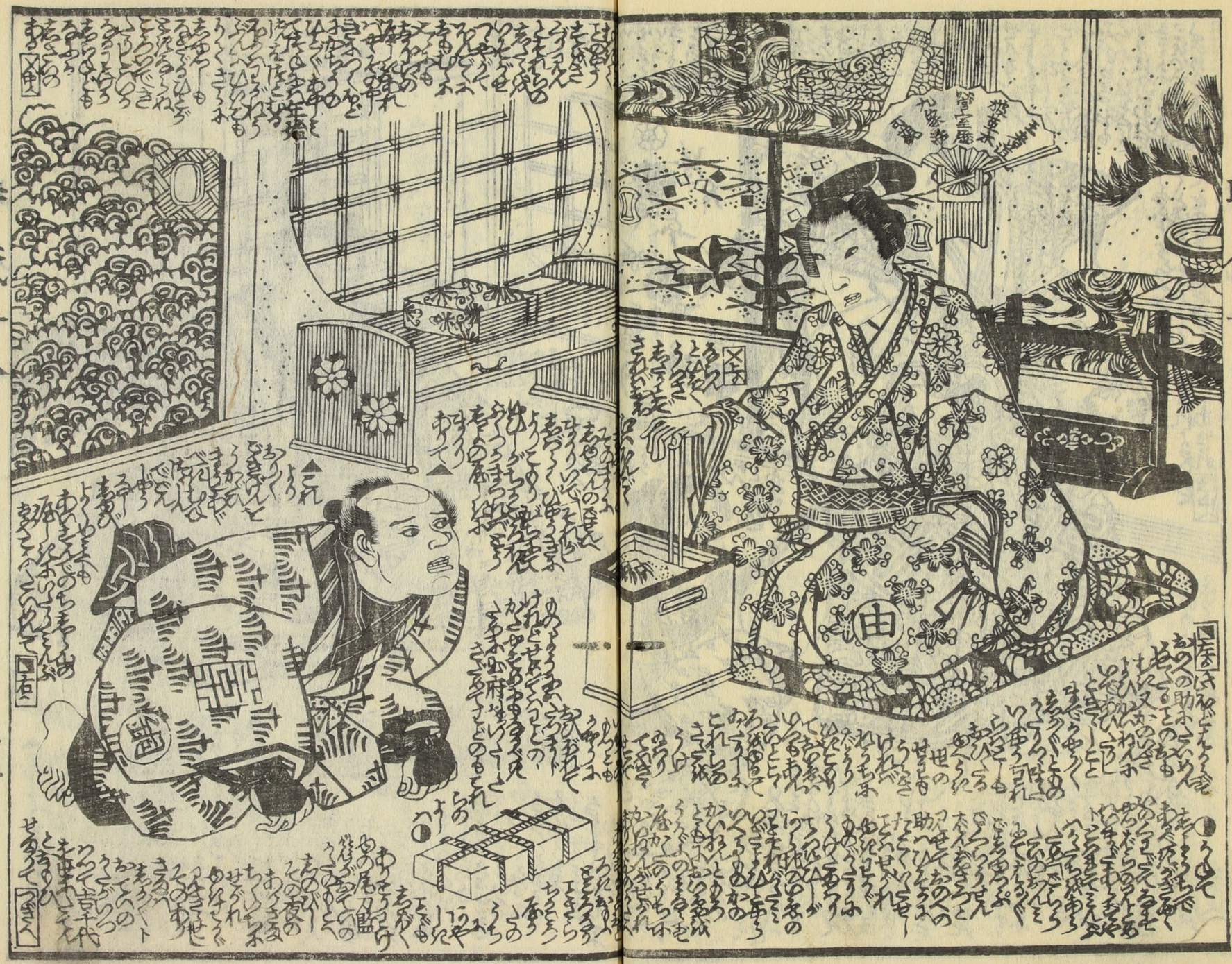
筆
正
由



春水作

海書箕田文友

筆
賓
由


由

雪
民

大

這画ハ第八編ヲ現したる圖
なれども重出
し本文を助く

民
雪
大

立
安
刀

時代世話八
十九
特七世市川
由
十八

刀
由
元
羽
立

一

水無月の空暑き日ハ只さへ體ふ持てつゝバ午睡ゝ宰予も叱言ハ聞くめり。然る成作者ゞ机の〳〵。書房の催促屢ゝ迫めく。肱枕だふ去るいとゞ迫めく。日くらし硯と首引まれど。佳き新工夫の浮むでもなく。出ゝ欠びゝ溜息の〳〵。額ふ汗をかゝ成ゝ心成尽〳〵一帙綴り上て責ゝと防げど。重荷ゝ小附の端昼あり。這も毎編の支ゝ成ゝ。然バ序文といふめゝ。筆ふ言ひせんこゝの葉も乏ゝ。有つる伝の支成並べゝ。巻端の餘帋を塞ぐ。

丙寅六月稿成
丁卯睦月新刻

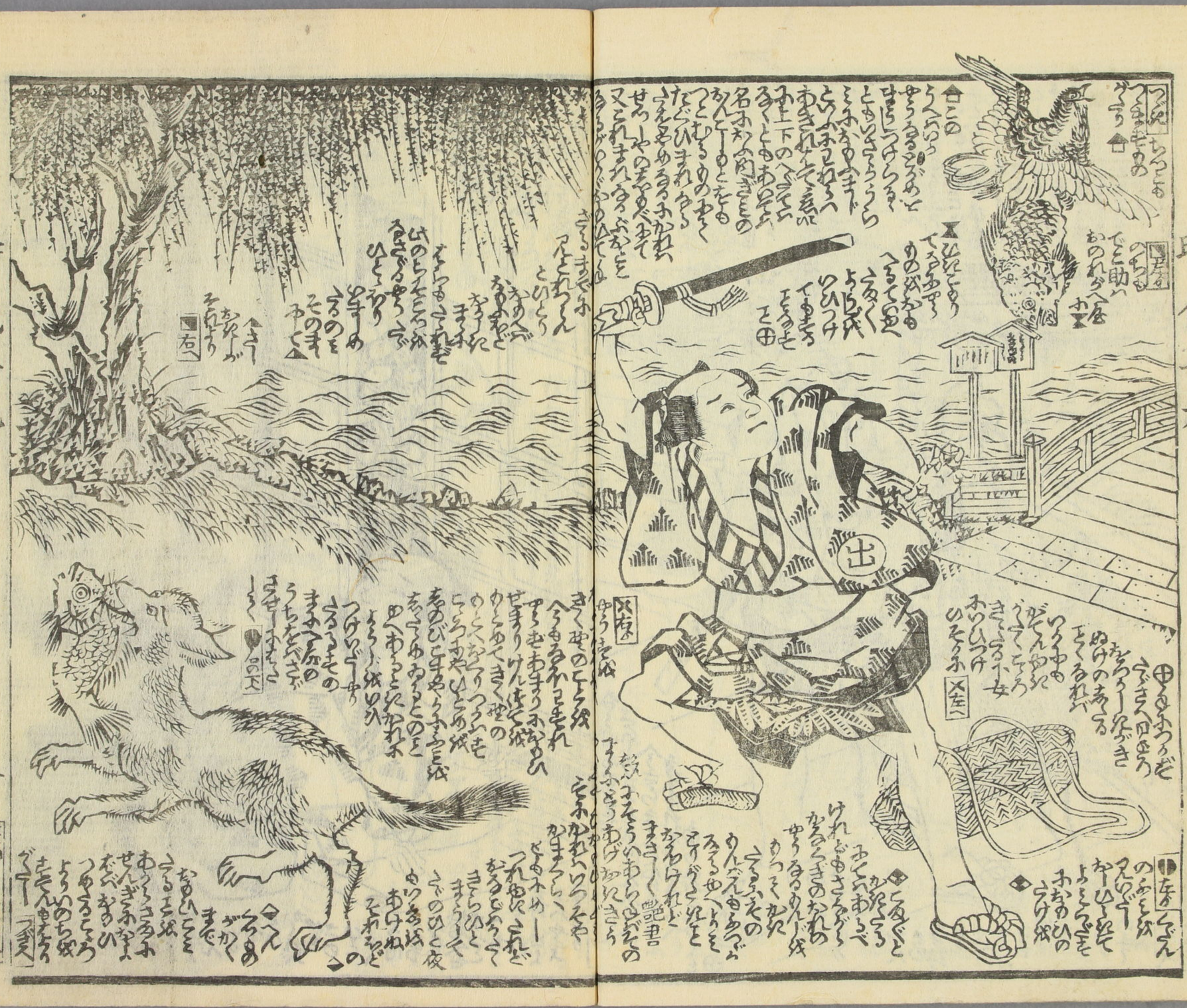
為永春水記

藤浪春辰
下奴出子助
侍女菊野

刀
由

安

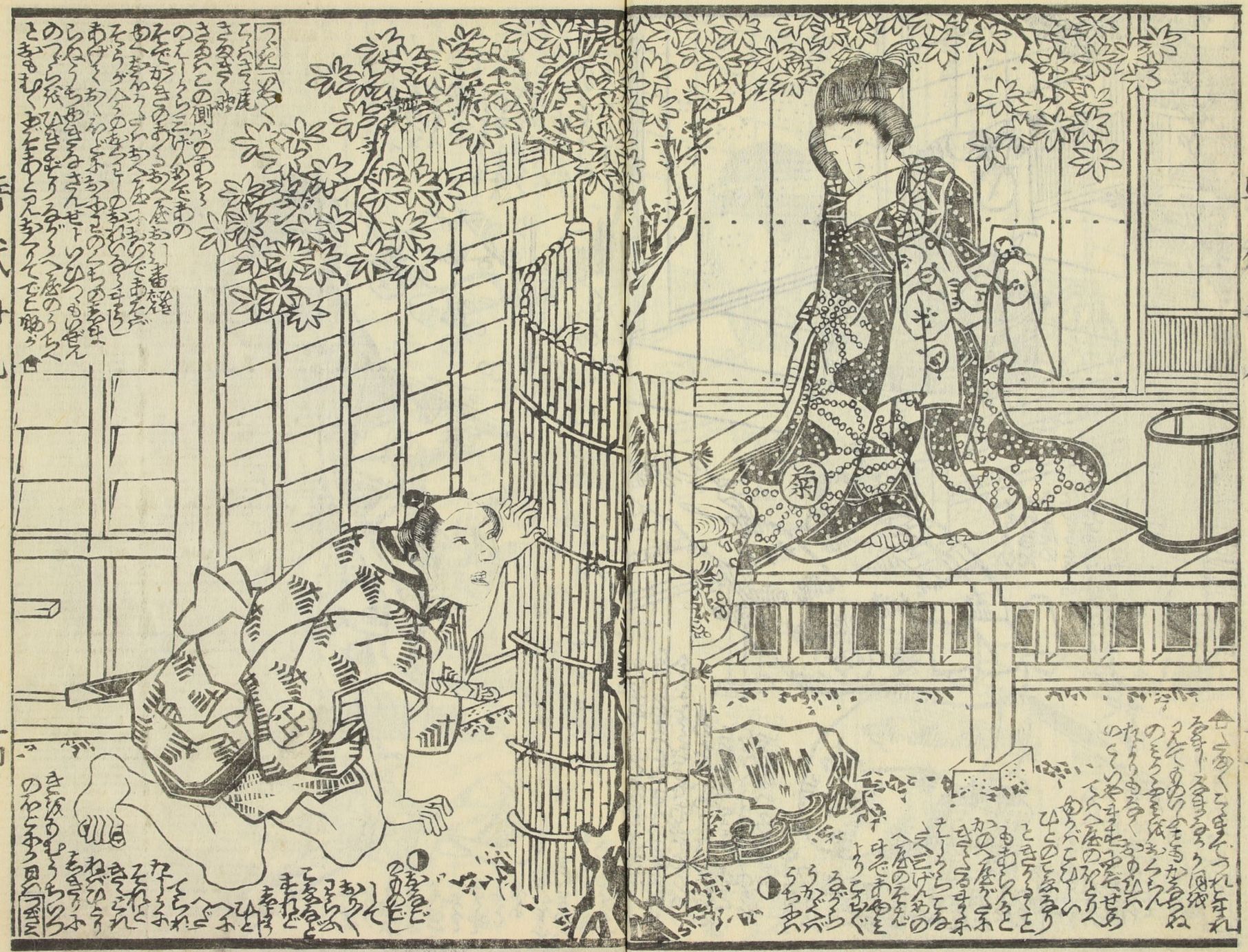
刀
由
穴

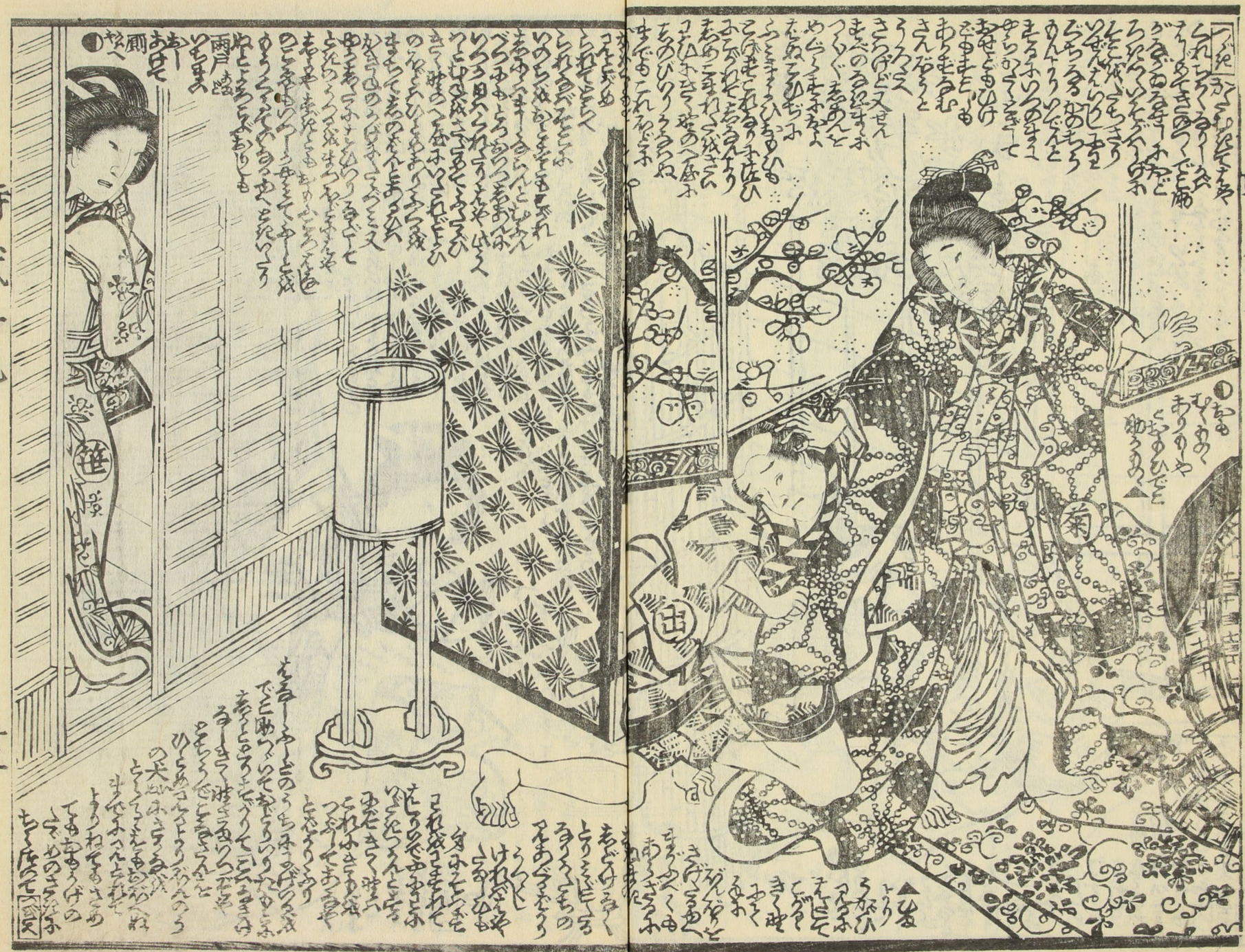


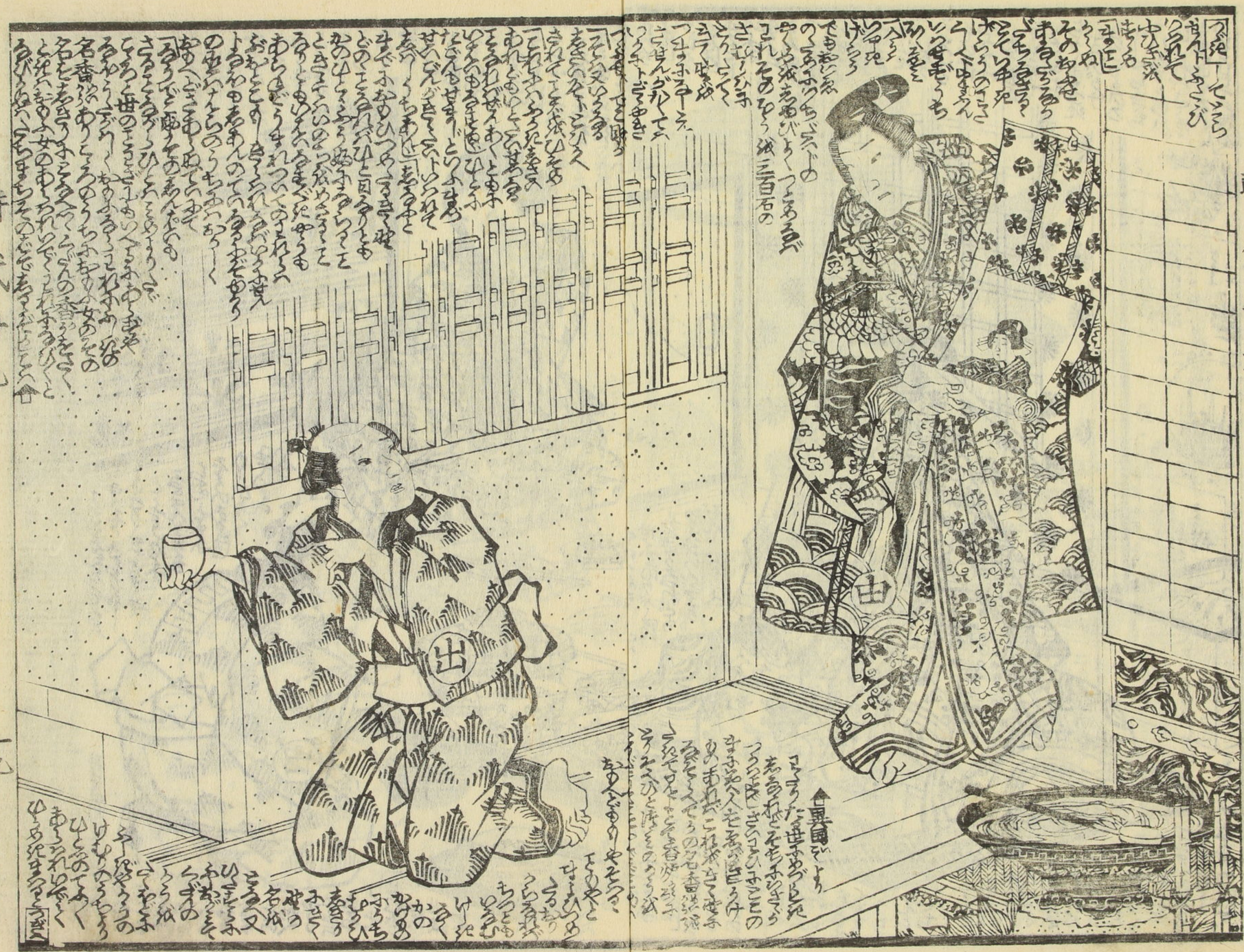
春水作 國貞画

浄書 箕田青洲

菊
丑


菊
五





濱
出
芋
正

朝鮮牛肉丸 大色金三朱 中色金一朱 小色百銅
第一ひの丸衛ひ者せの成ます ぬ業
あれば きょ ぶ
くれ 対及 深崎氏製

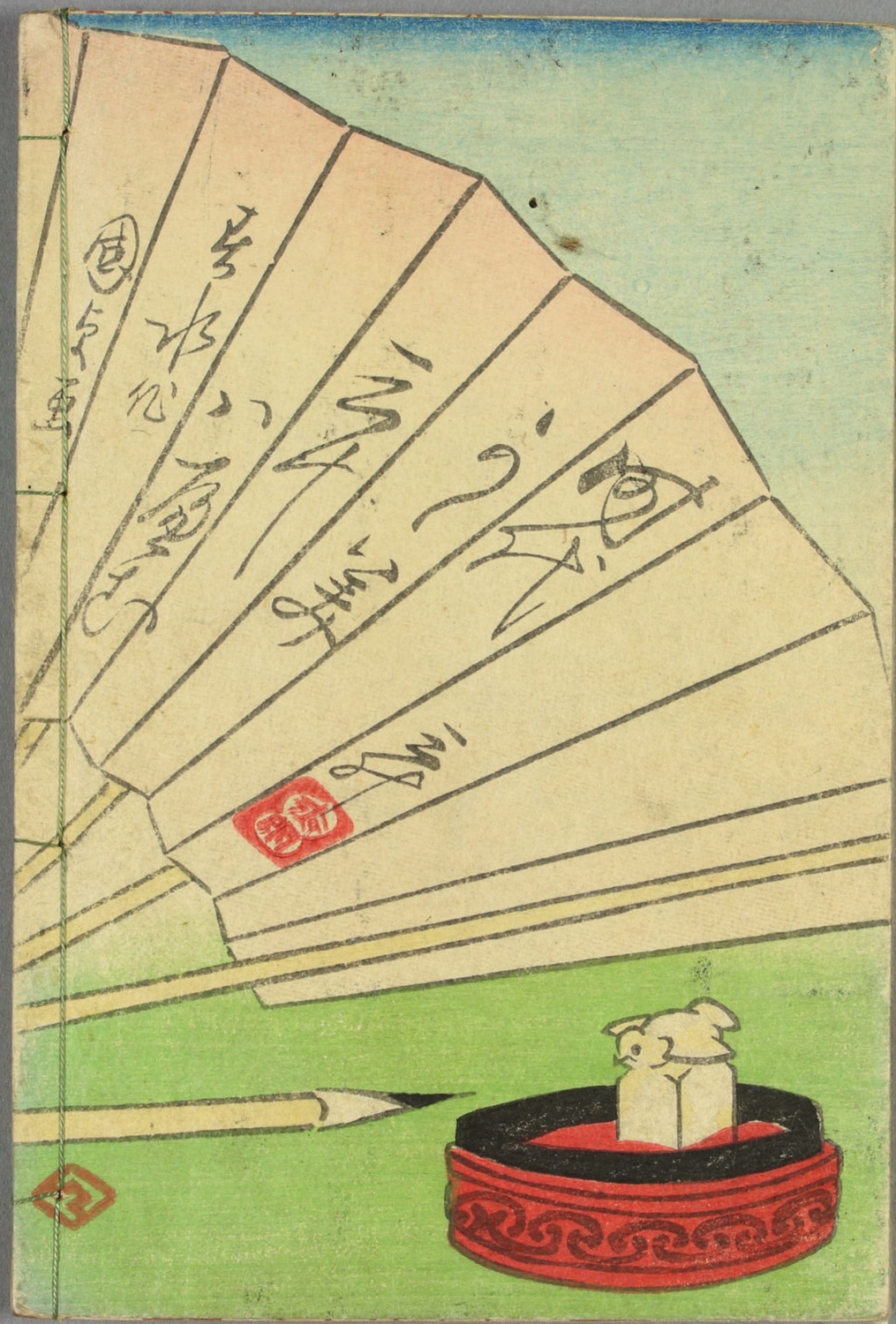
爲永春水作 歌川國貞画

慶應四戊辰年新刻目録

北雪美談 時代加賀見 三十八編 四十一編 爲永春水作 歌川國貞画

雑談雨夜質庫 六編 七編 出板 爲永春水作 歌川豊國画

池園物語 初編 二編 山々亭有人作 歌川國貞画

庭訓武藏鐙 六編揃 万亭應賀作 歌川國貞画

地本草紙問屋 若林堂 芝神明前 若狭屋与市板